新熊本市史編纂事業完了記念特集号

昭和63年（1988）、市制施行百周年を記念して始められた「新熊本市史編纂事業」は、平成14年度に全21巻22冊を刊行して事業のすべてを完了した。

平成15年10月10日には、最後の新熊本市史編纂委員会・発刊報告会に引き続き、編纂事業完了記念の式典及び祝賀会が開催された。

新熊本市史編さんだより

最終号

発行日 平成16年3月20日

編集・発行
新熊本市史編纂委員会
熊本市（市史編纂室）

〒860-8601
熊本市手取本町1-1
☎ 096-328-2038

第31回新熊本市史編纂委員会

最終回となる第31回新熊本市史編纂委員会が、白河部貞志氏、廣瀬賜代氏の新委員を迎えて10月10日17時から市内ホテルで開催され、15年間の編纂事業を締めくくった。事務局報告に続き、近世専門部会の松本寿三郎部会長、近代専門部会の山中進部会長から新熊本市史編纂事業最終年度にあたる平成14年度の事業内容が報告された。

●近世専門部会の主な史料調査・収集

三宅家（本荘）、仲光家、村川家、熊本大学付属図書館（永青文庫）、熊本大学五高記念館、熊本県立図書館、城南町歴史民俗資料館（東家家他）、熊本博物館、旧細川刑部邸ほか

●近代専門部会の主な史料調査・収集

大村家文書、熊本県立図書館、県立第一高校清香会、熊本博物館、市立図書館、国会図書館、東京市政調査会市政専門図書館ほか

●刊行物

研究論文集『市史研究くまもと第14号』、『熊本市史関係資料集第6集―熊本市工業生産物調査・熊本市職業調査』、『新熊本市史編さんだより第21号』

目次

第31回新熊本市史編纂委員会……1
第10回発刊報告会……2
新熊本編纂事業完了
記念式典・祝賀会……4
記念講話（工藤敬一）……7
『通史編近世Ⅱ』（松本寿三郎）……8
『通史編近代Ⅲ』（山中進）……9
『別編年表・索引』（鈴木喬）……10
郷土研究をめぐる人々
（鈴木喬）……11
「熊日出版文化賞」受賞ニュース……15
新刊本の紹介……16

第10回新熊本市史発刊報告会

10月10日17時30分から、通史編『近世Ⅱ』・『近代Ⅲ』、別編『年表・索引』の発刊報告が、新熊本市史執筆者が見守るなか編纂委員長から市長へ行われた。

永野光哉委員長、幸山政史市長の挨拶に続き、発刊3巻本の紹介が松本寿三郎近世専門部会長、山中進近代専門部会長、鈴木喬編纂委員からあった。

発刊報告会

編纂委員長挨拶

永野光哉

新熊本市史編纂委員会を代表して、発刊の報告並びにご挨拶を申し上げます。

先ずもって刊行計画に基づき、平成14年度刊行本であります通史編第4巻『近世Ⅱ』、通史編第7巻『近代Ⅲ』そして、別編第3巻『年表・索引』が予定通り発刊の運びとなりましたことをご報告申し上げます。

皆様、ご高承のとおり本委員会は、市制百周年の記念事業として熊本市の歴史を集大成すべく、昭和63年に設置され、その緒につきました。そして今日まで、市当局をはじめ委員各位のご支援のもと、各専門部会専門員の先生方を中心に、有史以前からの本市の歴史を総点検するとともに、埋もれた歴史史料を発掘すべく可能な限りの調査・収集を全国的に展開し、研究を重ねてまいりました。

平成14年度までに全21巻22冊を刊行するという遠大な計画でございましたが、本日、最後の刊行本であります3巻の発刊をもちましてすべての事業計画が完了いたしました。

今回、刊行された3巻の詳しい内容につきましては、のち程、それぞれの部会長さんからご報告いただきますが、通史編9巻、史料編9巻10冊、別編3巻の全21巻22冊が揃ったことにより、市域をとりまく自然環境をはじめとして、原始時代から古代、中世、近世、近代そして平成の今日に至るまで、熊本市域を形作っている有形無形の様々な歴史的事象が一望の下に見渡せるようになったのではないかと、任務を終えた大きな安堵とともに深い喜びの気持ちでいっぱいでございます。

編纂事業の15年間には、充分な研究蓄積がない中、短期間に22冊を刊行するということで、執筆の先生方には並々ならぬご奮闘をいただきました。ことに、今回の刊行本においては、前近代専門部会長の前田信孝先生が昨年の8月に亡くなられるその時まで、『通史編近代Ⅲ』の編集に心を砕いておられましたことが今なお忘れられません。また、今年4月には、同じく『通史編近代Ⅲ』にご執筆いただきました藤川治水先生もお亡くなりになりました。改めまして、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

最後になりましたが、事務局が、編纂期間中の思いもかけない困難な出来事に対し、迅速にしかも適切に対処してくれたことが、どれほど執筆の支えとなったことか、このことも申し添えておかねばなりません。

今後は、収集された文書史料とあわせて、発刊なった『新熊本市史』全21巻22冊が、熊本市の魅力ある発展のために、縦横に活用されることを期待して発刊の報告といたします。

発刊報告会

市長挨拶

幸山政史

第10回「新熊本市史発刊報告会」にあたりまして一言御挨拶とお礼を申し上げます。

皆様には、公私にわたり御多忙のところ御出席を賜りまして誠にありがとうございます。

只今は、永野委員長より平成14年度の刊行本であります、通史編『近世Ⅱ』・『近代Ⅲ』、そして別編『年表・索引』の3巻が見事に発刊されたとの御報告を誠に嬉しく、そしてありがたく拝聴いたしました。

皆様御存知のとおり、熊本市は、「熊本百年懇談会」の提言を受けて、市制施行百周年記念事業の一環として昭和63年から「新熊本市史編纂事業」に着手し、その編纂・刊行を編纂委員会に委嘱いたしたところです。それから15年間、委員会におかれましては、事業計画に従い順調に発刊を続けられ、本日御報告いただいた3巻の発刊をもってその計画の全てを完了するという偉業を成し遂げられました。

これもひとえに、執筆された先生方の並々ならぬ御奮闘そして、編纂委員各位の御指導・御支援の賜と心からの感謝を申し上げます。

熊本市では、現在、地方分権時代にふさわしい「個性と特色を生かしたまちづくり」を「市民と行政の協働」で進めていこうとしています。都市の個性が「風土」と「歴史」から成り立っている事を思えば、全21巻22冊の『新熊本市史』は、個性や特色を生かしたまちづくりの「鍵」の宝庫と言えるのではないでしょうか。市域がどのような地理的環境に位置しているか、そのなかで人々は何を考え、求めてきたか。また、熊本市はどのような経緯を経て現在に至り、これから、どんな発展をして行こうとしているのか。私たちのアイデンティティー形成の拠り所が『新熊本市史』の中に充満しているといっても過言ではありません。

今後は、先程委員長も言われましたように、魅力ある熊本市創造へ向けて、『新熊本市史』を「まちづくりの基軸」として充分に活用してまいりたいと思います。

幸い、編纂期間中には、先生方の長年にわたる調査・研究の成果である文書史料の集積が膨大な量になっています。編纂事業が完了したこれからは、広く市民が活用できるようにと、この程、目録のデータベース化に向けて予算措置を講じたところです。来年度中の公開に向けて目下、作業を進めているところでございますが、『新熊本市史』とともに、これらの史料が、一層の熊本市域における歴史研究等にお役に立つことを確信いたしまして発刊のお祝いの御挨拶といたします。

本日は、本当にありがとうございました。

新熊本市史編纂事業完了記念式典・祝賀会

10月10日18時30分から、新熊本市史編纂委員、専門部会専門員、熊本市議会議員、熊本百年懇談会委員、百周年実行委員会委員、依頼執筆者、市史研究・編さんだより執筆者、市史編纂協力員、事務局職員の総勢126人が参加して編纂事業完了式典が開催された。

編纂事業期間中の物故者（33人）への黙祷に始まり、幸山市長、永野編纂委員長の挨拶の後、編纂委員に対して市長から感謝状と記念品が贈呈された。

つづいて、編纂委員を代表して紫垣正良委員の「15年間の委員活動をふりかえって」の祝辞、そして編纂委員工藤敬一熊本大学名誉教授による講話「歴史的事実と真実」があり式典を締めくくった。

新熊本市史編纂事業完了記念式典・祝賀会

式典　市長挨拶

幸山政史

新熊本市史編纂事業完了にあたりまして、主催者としてひと言ご挨拶を申し上げます。本日、ここに、「新熊本市史編纂事業完了記念式典」を関係の皆様方とともに盛大に開催できますことは、この上ない慶びでございます。

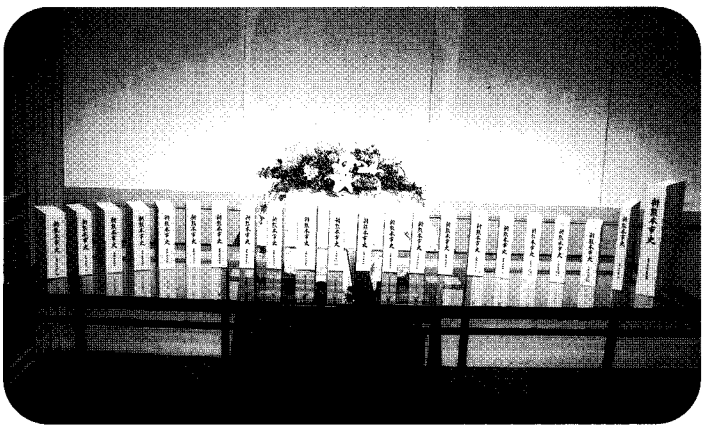
新熊本市史編纂事業は、昭和62年10月、「熊本百年懇談会」からの提言を受け、「市制施行百周年記念事業」の一つとして翌、昭和63年から始められました。平成14年度までに全21巻22冊を刊行するという、当時、日本一の規模を誇る壮大な計画でしたが、この度、全ての事業を見事に完了し、本日「事業完了記念式典」のよき日を迎える事ができました。非常な感動と喜びを感じているところでございます。

これも、執筆されました先生方の並々ならぬご奮闘と編纂委員各位の御指導、そして市議会を始めとする市民の皆様の温かい御理解・御支援の賜と厚く感謝申し上げます。

熊本市は、現在、来るべき地方分権時代に向けて、個性と特色を生かした「新しいまちづくり」に取り組んでいます。先程「発刊報告会」席上でも申し上げましたが、およそ「都市の個性」とは、その地域が置かれている「地理的条件」とそこで繰り広げられる人々の営みである「歴史」とで成り立っている事を思えば、まさに、『新熊本市史』全21巻22冊には、「熊本市の熊本市たる所以が余すところなく書き表されている」と言っても良いのではないでしょうか。市民と行政が手をたずさえて、次世代にまで責任の持てる新しい熊本市を築いていこうとしている今、発刊された『新熊本市史』が「歴史を背景にしたまちづくり」のために、心強い手引書になるであろうという思いを深くしています。

また、編纂と併行して収集されました文書史料も当初の予想をはるかに越える量となり大きな成果を上げることができました。今後は、研究者のみならず、広く市民の皆様の活用に応えられるよう只今、目録のデータベース化に向けて取り組んでいるところでございます。『新熊本市史』と同様、市民共有の財産として大いに役立てていただければ、これに過ぎる喜びはありません。

本日は、「編纂事業を」との御提言をいただきました「熊本百年懇談会」の方々を始め、歴代の編纂委員さん、市議会の皆様、そして、『新熊本市史』『市史研究』『市史編さんだより』にご執筆いただいた先生方、さらには、地元の協力員の方々をお迎えいたしております。また、裏方として事業を支えてきました事務局の方々もお集まりでございます。改めまして、この遠大な事業を始められ、また、継続してこられました先輩の方々に深い敬意を表しますとともに、百年に一度の「慶事」を共に迎えられることを慶び、お祝いの言葉といたします。



式典　編纂委員長挨拶

永野光哉

「新熊本市史編纂事業完了記念式典」に臨み、編纂委員会を代表いたしまして、ひと言お祝いの言葉を申し上げます。

市制施行百周年の記念事業として『新熊本市史』の編纂が本委員会に付託されましたのは、昭和63年でございました。爾来、時代別・分野別に、「自然」「原始・古代」「中世」「近世」「近代」「現代」「民俗・文化財」と7つの専門部会を編成し、有史以前からの本市の歴史を総点検するとともに、埋もれた歴史史料を発掘すべく可能な限りの調査・収集を全国的に展開し、研究を重ねてまいりました。15年間という長い編纂期間中には、事業の遂行が危ぶまれるような事態もいく度かございましたが、その都度、編纂委員会や部会長会との緊密な連携のもとに、専門部会専門員と事務局が車の両輪となり問題解決にあたり、事業計画の推進に勤めてきました。本日、こうして『新熊本市史』全21巻22冊の刊行を無事に終え「完了記念式典」を迎える事ができましたことは、誠に感慨深く、大きな安堵と喜びの気持ちでいっぱいでございます。これも、事業完了までにお寄せいただいた関係の方々のご尽力の賜と心からの感謝を申し上げる次第です。

編纂委員会では、事業計画の策定にあたり、「人々の生活が見える市史」を目指すと同時に「歴史事実を明らかにする貴重な史料・文献などを広範囲に収集してその滅失を防止し、郷土の研究及び学術文化の振興に資する」ことを目標に掲げ編集に臨みました。今回、通史編9巻、史料編9巻10冊、別編3巻の『新熊本市史』全巻が揃ったことにより、市域を取り巻く自然環境をはじめ、有史以前から平成の今日に至る「熊本市」の有形無形の歴史的事象が、一望の下に見渡せるようになったのではないかと思っております。

また、編纂と並行して進められました史料の収集も当初は、「西南の役」や「第二次世界大戦」による焼失、さらには「水害」などの天災による消滅が危惧されていましたが、精力的な調査収集に加え、市域を中心に全国から協力を得ることができ、予想をはるかに越える量の成果を上げることができました。

本来、人には自らのことを知り、さらには自分の住んでいる土地を中心に、周辺の地理や歴史を理解したいという欲求が強く働くものでありますが、それは、歴史を認識することがいかに豊かな実りをもたらすものかを知っているからでしょう。幸い、先程は、幸山市長さんから収集された史料を「活用へ向けて準備しているところ」とのご発言もありました。これらの収集史料を歴史研究のみならず、将来に渡って「個性有るまちづくり」の参照軸として役立てていただければ、編纂に携った者として更なる喜びでございます。

本日は、「新熊本市史編纂事業」の完了までに各方面からお力をいただいた方々がお集まりでございます。改めまして、今日までにお寄せくださったご指導・ご協力に心からのお礼を申し上げ、お祝いの言葉といたします。

式典　編纂委員挨拶

紫垣正良

何事にも原点というものがありますが、新熊本市史編纂の原点を顧みますと、時の田尻市長から「市制施行百周年記念事業の一環として市史編纂事業を始めるとしたらいったいどれくらいの期間を必要とするでしょうか」と訊ねられた、その時ではなかったかと思います。

私は、そのとき司馬遷の『史記』130巻を思い浮かべながら「20年はかかるかな」と考えていました。いま振り返りますとそれから早15年が経過し、原始時代から現代までを表した全21巻22冊という後世に誇るべき立派な市史がこのように完成して誠に感無量の思いがいたしております。

15年間の期間には、田尻氏、三角氏と歴代市長の高いご見識のもと予算措置が講じられ、今また、幸山市長から事業終了後の史料活用に向けてのご意志を伺いました。この厳しい財政状況の中でのご英断に敬意を表するものでございます。

編纂委員会には、議会の各会派から1名の委員を選出して運営にあたりましたが、こと市史に関しましては、強力な執筆陣に加え、執行部・議会さらには事務局と平仄（ひょうそく）がピタリとあっておりまして、それが今日の祝賀会につながったと思っております。

新熊本市史の完成が、歴史と伝統を誇る熊本市の風格を更に高めるであろうことを共に喜びたいと思います。

祝賀会

幸山政史市長挨拶

熊本が、古くから豊かな地域であることは、かねてより聞き及んでいましたので、通史編の『中世』を開いてみました。すると、その1ページに「肥後の国は九州唯一の大国である」と書かれているではありませんか。政令指定都市を目指している熊本市にとって、なんとも心強い歴史的事実の発見であります。今後一層、発刊された『新熊本市史』が収集文書史料ともども、折に触れそれぞれの関心に添って使われますことを期待して、簡単ですが祝賀会はじめの挨拶といたします。

本日は、本当にありがとうございました。

安永蕗子編纂副委員長　乾杯挨拶

刊行された市史22巻のなかには、いったいいくつの文字が入っているのでしょうか。それらの文字は全て中国からやってきました。日本人は、それらを使いこなして世界一長い『源氏物語』を創りあげたのです。

今日は、「双十節」・「辛亥革命」の日です。そして孫文を支えたのは熊本の宮崎滔天です。日中の交流に思いを馳せながら乾杯いたしましょう。

新熊本市史編纂事業完了記念講話

歴史的事実と真実

編纂委員　工藤敬一

「歴史家は史料を以って虚構を語り、文学者は虚構を通じて真実を語る」といわれます。歴史学を研究する者としては、いささか心外な気持ちにもなりますが、確かに一面の真実を示していると思います。

歴史の研究は、史料に基づき歴史的事実を明らかにし、その連関の中で歴史像を形成し叙述する営みです。自治体史の叙述などでは、古代・中世史のように、残存史料が少なく同時代の史料を網羅的に集めて検討する場合と、近世・近代史のように、残された史料が膨大でとても網羅的収集は困難な場合とでは、具体的方法は異なりますが、いずれにしても史料でわかることは過去の事実のごく一部だけである、という点で、ことの本質においては同じです。歴史学は常に史料的制約を免れません。これに対し文学者（作家）は、虚構＝フィクションでその制約＝限界を超えることができるのです。

私は近年、北方謙三の歴史小説を愛読しています。ことに私の専門とする中世、南北朝期についての四・五点は本当に面白い。その中で最初に読んだのが『武王の門』です。この主人公は征西将軍宮の懐良親王と菊池武光です。この二人を主柱とする征西府は、全国的には足利尊氏を中心とする武家方（北朝方）が圧倒的に優位の時代に、十数年にわたり九州の中心勢力としての位置を占めたことはよく知られているところです。しかし、どうして征西府がそれだけの力を持ちえたのか、残された史料は容易に語ってくれません。北方は、殆んど史料を残さぬ西海の海民や九州脊梁山地の山の民の活動を組み込むことで、なるほど、と思われる歴史像を作り上げています。また最近読んだ『楠木正成』や『悪党の裔』は、鎌倉幕府の滅亡から建武政権の崩壊までの戦乱を、所領（土地）を基盤とする鎌倉武士（正統派武士団）と、鎌倉時代後期から活発化した商業・交通に寄生し、それを活動基盤としていった悪党的勢力（その代表が正成や赤松則村）の対抗として描き、前者（その代表が足利尊氏）が後者を倒し、それを体制内に飲み込むことで、武家政権を以後五百年にわたり在続させるに至ることを示唆しています。網野善彦らの研究を踏まえ、時代の本質を見事に描いています。北方は、これまで歴史学が明らかにしてきた歴史的事実に基づき、そこから構想し得る可能性の世界を、フィクションとして描き切ることによって、歴史的事実を超えて真実に迫っているといえるでしょう。

『新熊本市史』は、史料編・通史編ともども膨大な史料を紹介し、多くの歴史的事実を明らかにしました。「歴史とは現在と過去との尽きることを知らない対話」（E・Hカー『歴史とは何か』）です。今後多くのかたがたが、『新熊本市史』と対話を重ね、より豊かなそしてより真実に迫る熊本の歴史像と未来像を語っていただくことを期待したいと思います。

『通史編　近世Ⅱ』を刊行して

近世専門部会長　松本　寿三郎

本巻は既刊『近世Ⅰ』の続編として、一六世紀の佐々成政の肥後入国から明治三年の藩政改革までを対象に、熊本市域（飽田・託麻郡と合志・上益城の一部）の町村の歩み、および教育・文化の進展を一巻にまとめたものである。近世の農村関係史料は豊富であり、研究者も少なくなく、研究の蓄積も各分野にわたっているが、文化・芸術・芸能の部分はそれぞれの専門家に執筆を依頼、お蔭で一〇〇〇ページを越える大冊の通史が出来上がった。近世の熊本市について、政治・経済・文化・社会にわたって、基本的な問題はほぼ網羅できたのではないかと思われる。大まかな構成は以下の通りである。

「第五編　熊本城下をとりまく村々と農民の社会生活」第一章では市域である飽田・託麻郡を中心に、合志郡大津手永・上益城郡沼山津手永の一部を考慮しながら、郡村の支配機構として郡代・手永と惣庄屋、村々と村役人の変遷を押さえ、第二章では近世初期の農村と農民支配の確立をとりあげた。国衆一揆後の加藤氏による農村の近世的編成、細川氏による農村支配体制の基礎と身分編成確立過程が、豊富な史料と研究の整理によって解明され、初期農政の実態と年貢収取体制を跡付けた。第三章・第四章・第五章は中期・後期・幕末期の農村の問題点を掘り起こし、農政がいかに対応したかを主眼として検討している。元禄期以後農村では農民の階層分解・潰百姓の輩出が見られるようになるが、これに対応して農政に新たな局面が見えてくる、年貢収取の安定を図る土免から請免への転換、農村再建策と年貢強化策の路線対立、明高への対処と検地指向、諸々の問題をかかえて、宝暦の農政改革は一時的な安定をもたらしたが、寛政期には再び農村の零落を招来し、郡代と惣庄屋による勧農富民策が特長的に示される。第六章は従来あまり取り扱われたことのない農村の生活を取り上げた。農村の文化、村の祭り、村に住む武士と給知百姓の関係など村落生活の側面をうかがうものである。

「第六編　熊本城下をささえる港町と交通・運輸」第一章川尻町の港町とその機能、第二章高橋・小島の港町とその機能、第三章交通と運輸・情報からなる。一・二章では五ヶ町の川尻町・高橋町と在町小島町を取り上げた。川尻町は藩の御船手・作事所を持つ水上交通の拠点であり、川尻蔵からの大阪登せ米と廻船交易、特権商人の存在に特色があり、高橋町は熊本城下町の外港として坪井川舟運物資輸送の拠点として機能したが、坪井川・白川の土砂堆積により下流の川口に高橋川口・小島川口番所が設けられることにより、在町小島は幕末維新期には新たな港として発展した。本編では川尻・高橋・小島の港町の諸分野について検討されており、得がたい基礎的な研究といえるであろう。第三章交通と運輸・情報では陸上交通通路の街道・交通・番所・宿駅・飛脚・助郷・在町から、舟運・港・廻船、情報の伝達・物価にいたる諸項に及んで洩れるところがない。

「第七編　教育・学問と文化」第一章教育と学問の発展は時習館の文芸・武芸を始め私塾・寺子屋など従来の研究に従っているが、第二章伝統文化の継承と新文化の形成は、今まであまり取り扱った事のない能楽、茶道、俳諧、肥後六花、博物学、華道、肥後琵琶、相撲・芝居興行、肥後来訪の人々を取り上げて興味深い構成になっている。第三章花ひらく絵画等の芸術は、肥後の絵画と刀剣・彫金・甲冑・松尾焼を取扱う。第二章・第三章はそれぞれ専門家に執筆をお願いしたが、それぞれに力のこもった内容で読者に満足感を与えるものである。

本文一〇八二ページ、年表二三ページの大部であるが、どの部分を取り上げても力作ぞろいで、新しい知見に満ち満ちており圧倒される内容である。執筆の皆さんのご苦労を多としたい。執筆の皆さんは、史料が得られなかったとか、時間的に十分な検討がなされなかったとかの不満がないでもないが、私の見るところでは、現段階で到達できる最高のものである。この書が熊本近世史研究の出発点になることを期待したい。

『通史編　近代Ⅲ』を刊行して

近代専門部会長　山中　進

このたび、『新熊本市史』（通史編・第七巻・近代Ⅲ）が、発刊の運びとなりました。ここでは第一次世界大戦からアジア・太平洋戦争での敗戦にいたるまでの約三十年間を取り上げています。

本書は第五編「大熊本市成立の周辺」と、第六編「十五年戦争と熊本」の二編で構成されています。「戦争」という世界史的な大きな出来事が、日本の政治や経済、社会、それに人々の暮らしを揺さぶり、変革していった時代です。そのため、取り上げなければならないテーマは盛りだくさんでしたが、それらをできる限り網羅しました。しかし、執筆当初から懸念されていたことは、この時代は全般的に史・資料が少なく、主題によっては多くを新聞資料に頼らざるを得ないという部分もあって、八名の専門員は言うに及ばず、執筆を引き受けて下さった六名の方々も大変ご苦労されたことと思います。それでも精力的に史・資料の収集に奔走して頂き、また、編纂室の職員挙げての協力と支援もあり、さらには多方面から歴史資料や写真等の提供もあって、どうにか発刊にまで漕ぎ着けることができました。

内容としては、熊本が世界や日本の近代化のうねりのなかで、どのように変容し、変貌を遂げていったかを、体系的にとらえていくよう努力しました。また、熊本の「地域性」、「らしさ」の背景にも注意をはらっています。そのため第五編では、第一次世界大戦との関連で第六師団、近代産業と経済の動向、都市の近代化に、第六編では軍国主義と中国派兵、産業の統合、教育・文化、戦時下の市民生活等に、やや重きをおいています。これらの主題は、これまであまり目が向けられなかった分野や、新たな視点からのもの、さらには従来の研究を深化させたものと様々ですが、いずれにしても熊本の近代史研究がこれを踏み台として、さらなる発展をみることを期待しています。なお、本書は十四名の執筆者が、史料的な制約や限られた紙数のなかで、時間と格闘しながらできあがったものですので、内容の記述に濃淡・深浅がありますが、これもみかたによっては執筆者の個性やこだわりが出ていて興味深いものがあるかと思います。

ところで、近代専門部会にとっては、本書の刊行に至るまでの間に大変悲しいことがありました。市史刊行に全精力を傾けておられた前部会長の前田信孝先生と、依頼執筆者の藤川治水先生が、本書の発刊を待たずしてなくなられたことです。誠に残念でなりません。ここに改めてご冥福をお祈り申し上げる次第です。

最後に、今回の発刊に際し、多くの機関・団体・個人の方々には、数多くのご協力・ご支援を頂きました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。どうか本書が広く市民の皆様に活用されて、熊本の歴史や地域への理解が深まっていくことを願っております。

隣接11か町村を合併し、大熊本市が発足。記念碑前（現、辛島公園）で合併を祝う市民　大正10年（1921）（熊本市蔵）

『別編　年表　索引』の紹介

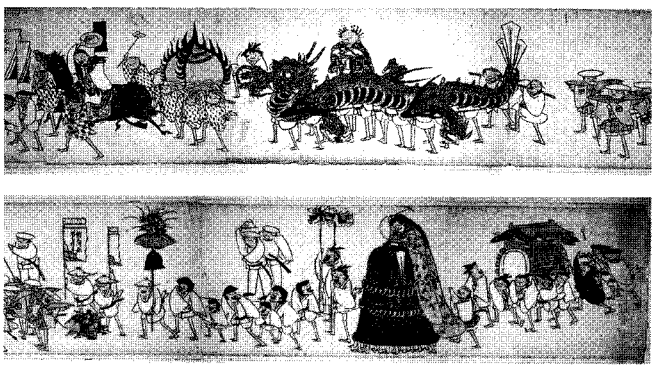
編纂委員　鈴木　喬

『新熊本市史』の最後の締めくくりとして、別編の第三巻で「年表」と「索引」が刊行された。本の刊行などに無関係な人はそれだけ聞くと「まあ附録までつけて」とか「お役所だから御丁寧なことを」などと余計物扱いと考えがちであるが、決してそうではない。仮にも専門書を編纂する時は、この二書は必要欠くべからざるものなのである。

既に昭和七年の『熊本市史』でも、平野流香氏は索引の重要性を考えていて、娘達を総動員して不充分ながら総索引を作っている位である。しかしこの時には章別に事項を羅列した程度で終わっており、読者に充分便宜を与えたとは言い難かった。そこで昭和四十八年の地元による復刻版では人名・地名・事項に三分類した総索引を添付したところ、非常な好評を博した。そのせいで、同復刻版の古書の価格が原本に比して数千円の高値を呼んだ位である。総索引が如何に多大の便宜を与えているかということを如実に示した実例である。

『新熊本市史』は通史編だけで九巻、頁数にして一万千余頁にのぼる。従って、この総索引だけは何を措いても完成して読者の便宜を図らなければならない。そこで担当執筆員と事務局員の夜を日に継ぐような努力によってA4版で一八一頁に及ぶ総索引が出来上がった。巻数表示は○で囲み、頁数の表示はアラビア数字だけとし、項目以外のものは写真・図・表などと表示した。最後には通史編全九巻の総目次を掲載して索引の際の一層の便宜を図った。総項目は実に一万五千に達している。

「年表」の作成もまた大事業であった。各巻別に年表を添えてもらってはおいたが、やはり全体として通観出来る年表が必要である。今日の歴史教育では近世・近代・現代史に重点を置いている。従って年表の項目も現代に向かって傾斜する方向でなければならない。その観点に軸足を置いて近世以降に重点を置いたので、原始・古代・中世一〇頁に対して近世二七頁、近代七〇頁、現代は平成一〇年までに七四頁を割き、近現代にウエイトかけた。しかし地域史年表の欠点は、世界的・全国的な視野を外れることである。そこで原始・古代・中世までは所謂昔風の時代区分ごとに国内・国外の重要事項を記述し、近世は「天正・慶長」などの年号で区切り、近代以降は一年毎に区切って対照出来るようにした。また年表に出てくる重要事項の解説も右欄に出来る限り記述して便宜を図った積りである。



横手手永雨乞行事（熊本大学五高記念館蔵）

郷土研究をめぐる人々 ④

編纂委員　鈴木　喬

戦前・戦中（続き）

五高教授鈴木登についてもう少々布衍したい。鈴木の温厚な性格から学生の信頼が厚く、自宅を訪れて意見を叩く者が多かった。学生達は、複数で来訪して夜まで話し込むのが常であったが、鈴木は大人の来客と同様に待遇したので、学生は感激した。これらの中には史学に志す者が多く、後に戦後の郷土史に大きく貢献する学者として松本雅明・徳永春夫・志方正和・野口三男等を輩出した。

また地理関係では八代中学（現高校）校長であった下間忠夫と市立高女（現必由館高校）教諭の平野芳洲が著名であった。下間は終戦前後は熊本中学（現熊本高校）校長で、その著『熊本県地貌誌』は現在でも名著の誉が高い。下間は津和野亀井藩の家老の家で、幕末・明治の著名な蘭学者西周（にしあまね）もその身内であるが、昭和二一年まで熊本で過ごしたため、今淋しく津和野の墓地に眠っている。

下間　忠夫
『熊中 熊高百年史』より

平野芳洲も温厚な人柄で、熊本中学教諭から市立高女教諭を歴任し数々の業跡を残したが、第二次大戦末期に出征中の期待の長男がビルマ戦線で戦死したとの確報があり、すっかり希望を失って職を辞し引退してしまった。

地歴研究会の最後の事務局長は黒髪小学校長の河野亨であった。率先垂範型の直情径行の人で、かつて黒髪小の児童が放課後白川に一人で泳ぎに行って溺死したことがあり、早速新聞記者が来て校長の責任を云々した時「家に帰ってからは親の責任」と言い切った豪毅の人でもあった。河野は頭髪が後退して額が広く、逆に頬から顎にかけては鬚が濃くて「達磨さん」のニックネームがあった。学問熱心な人で史跡調査等に率先従事していたが、戦争中に南方の司政官として赴任したまま遂に帰らなかった。

河野　亨
『記念誌黒髪』より

『地歴研究』最後の編集者で発表会の企画立案実施者は男子師範の古林光雄であったが、この人も戦後は職を退いて姫路に帰ってしまった。

戦中・戦後

地歴研究会員で、戦中・戦後を通して多くの著書を残し、後進を被益したのは、九州日日新聞（昭和一七年熊本日日新聞となる）記者の下田一喜であった。下田は小川町の生れで現富合町で育ち、明治末に雑誌『九州の教育』で人物評論の懸賞論文に優勝を獲得して九州日日に入社し、教育関係記事を担当した。記者は雅号で知られねば一人前ではないと言われた時代で曲水と号し、その名で一般に知られた。彼には多くの郷土史関係編纂書があり、『下益城郡誌』『宇土郡誌』『稿本肥後文教史』『肥後名僧伝』『西南役側面史』『明治天皇肥後行幸誌』『肥後川尻町史』等を戦前に、戦後にも『熊本城今昔記』『基督教と熊本』『宇土市史』『砥用町史』等の編纂を行い、昭和四三年に八六歳でなくなった。彼は新聞記者であったから、取材の「夜討朝駈け」はお手の物であったが、尋ねられる方にとってはさぞかし迷惑であったであろう。

下田　一喜
『肥後川尻町史』より

戦中・戦後をともに生き抜いた郷土史家では、このシリーズの②

で紹介した後藤是山と中川齋がいる。二人とも戦後の郷土史界をリードし、ともに県の近代文化功労者に推挙され、後藤は熊本市の名誉市民にも推戴されている。中川は戦後熊本市に居を構え、自宅で郷土史の塾を開き後進を導いていたが、昭和四六年一月一日に自宅と一切の史料を火災で焼失して失意の内に同五一年九〇歳でなくなった。後藤は中川と合い年であったが丁度一〇年長生きして一〇〇歳を迎えた。

さて戦前の『地歴研究』が休刊を止むなくされた昭和一三年に、『日本談義』を創刊したのが荒木精之である。荒木は隈府（現菊池市）の出身で、父は小学校の校長であったため城北各地を転々し、小さい頃高森では後の女子大教授圭室諦成（たまむろたいじょう）に子守りをしてもらったことがあるという。東京に出て日本大学の史学科を卒業して隈府に帰り学校で教えていたが、昭和一三年熊本に出て維持会員を募り『日本談義』を創刊した。

荒木　精之
『荒木精之著作集』より

日本談義創刊号
『日本談義総合索引目録』より

『日本談義』では日本精神の皷吹を目標としたが、当時の軍部独裁時代にはそうした表現でなければ雑誌の発刊はおろか紙の配当も許可にならなかった。荒木自身も菊池氏の南朝一辺倒の純粋な態度や神風連の敬神絶対の精神に共感しており、神風連の墓捜しに精魂を尽して遂に全員の墓碑を発見し、著書にまとめた程の敬神家であるから、その傾向は戦時中の『日本談義』にも顕著であった。

戦争末期には三七歳の彼までも一六部隊に召集されたが『日本談義』の刊行は続けた。しかし昭和二〇年七月一日夜の大空襲で印刷できたばかりの本は家とともに焼失し、遂に幻の雑誌となってしまった。

八月一五日の終戦直後、荒木が中心となって尊皇義勇軍を結成したが、間もなく終戦が天皇の御意志であることが明らかになったので解散し、宇土半島で開拓事業に従事していた。しかし多くの人士の要望に抗しきれず、昭和二五年熊本に帰り『日本談義』を復刊した。爾来月刊で一月（ひとつき）の遅刊・欠刊もなく継続したが、昭和五六年一二月三〇日に荒木が急逝したため五七年三月号をもって終刊となった。復刊三七七号で戦中からの通巻では四六四号を数えた。戦前は日本精神高揚と文化の中央集権排除の立前であったが、戦後は無党派的な地方文化雑誌として維持員二〇〇〇人を擁し執筆者も二〇〇〇人という層の厚さで、全国的にも異色な地方雑誌であった。

荒木は史学者であるとともに文学者でもあったため、郷土史家達や小説・詩歌の投稿の取捨選択眼が確立しており、また自ら進んで寄稿して呉れない史家には自筆で寄稿を依頼したため、郷土史に関する貴重な史料の集積がみられる。自らの調査した史稿も随時掲載しており、晩年には将来多くの人が活用できるようにと総目録の作成を企図した。荒木はあたかも自らの死期を覚ったように『日本談義』の総目録の作成に熱中し、その原稿を完成してなくなったので、総目録は日の目をみて今日多くの史家に被益する所が大きい。

戦後

荒木精之・中川齋・後藤是山・下田一喜等の民間史学者の他に、戦後は大学の史学者達が郷土史の発展に大きく寄与した。その中でまず戦前の地歴研究会的な研究団体の再興を図ったのが、当時五高（現熊大法学部・文学部）教授であった松本雅明である。松本はまず戦前に地歴研究会が実施していた研究者達の発表会を五高で開催し、その席で「熊本史学会」の設立を成し遂げた。爾来熊本史学会

松本　雅明
『熊本近代文化功労者』より

は熊大文学部の国史教室を中心にして今日まで確実な運営を続けている。

松本は城南町の出身で、戦前に五高助教授になっており、戦後の熊大では教授で法文学部長を勤めた。元々東洋史専攻であったが、戦後は各地で発掘調査の現場を指揮して次々に報告書を発表した。熊本市内の渡鹿廃寺・託麻郡衙跡・水前寺廃寺・大道寺跡・出水国府・出水国分寺・同尼寺跡など古代官衙・官寺のほとんどを網羅しており、後学の指標となった。また彼の編著に成る『城南町史』は長く町村史の最傑作とたたえられた。退職後に病を得て車椅子の生活となったが、賢夫人の介助によって学問を楽しみつつ余生を送った。

戦後東京から熊大に赴任したのが森田誠一教授である。森田は在京が長かったが、元々は熊本の出身であったから藩政・藩制に関する研究が詳しい。著書も近世に関するものがほとんどであるが、退職後研究グループの指導に当っているうちに病を得て不帰の客となった。

森田　誠一
熊本大学『法文論叢』より

また熊大助教授に山口修がいる。戦後の赴任で在任期間はあまり長くなかったが、その知見と文筆の才を見込まれて、熊本日日新聞に「熊本の歴史」を連載して好評を博した。後にこれは五分冊の『熊本の歴史』として刊行され、昭和三〇年代の郷土史の基準となった。熊日はこの連載には特に力を入れ、県内の主な史家を時代ごとに集めて山口との座談会を持ち、郷土史家との懇談会を開いて具体的な史実を教授して貰うようにしたため特に好評を博したものと思われる。

山口　修

山口はのち東京に移り、聖心女子大の教授となったが、たまたま女子学生を中国の歴史探訪に伴ったとき、奥地で交通事故に遭って学生一人が死に、自らも重傷を負うという不運に遭遇した。幸い負傷は全癒したが、その後京都の仏教大学に移り、爽かな弁舌で歯切れのよい講義を聞かせていたが、数年前仮初めの病から思いがけなく急逝した。ＮＨＫの教育セミナーで歴史講座を担当して全国に知られていたが、熊本に関する著書も多い。山口はお酒に強い人であったが、それは熊日がかつて「熊本の歴史」の連載中に、山口を旅館に軟禁して毎日酒びたりにして原稿を書かせたせいであったという伝説がある。

熊大にはもう一人、原田敏明教授がいた。東大講師から皇学館大教授を経て、熊大発足とともに法文学部教授に迎えられ、部長・図書館長を歴任した。古代宗教・農村の宗教と祭祀の研究に努め、雑誌『社会と伝承』を発行して学界の注目を浴びた。原田教授の自転車旅行と言われるように、暇があれば県内各町村の神社を自転車で尋ね歩く実地調査を続け、数多くの発表と実績を残して東海大学に移り、のち日本宗教学会名誉会員に推戴された人である。

熊本市には熊大の外に県立女子大学（現熊本県立大学）も出来ていて、県でも優秀な人材を集めていた。今日では大学は長嶺の日赤近くに移転しているが、発足当時は渡鹿の現在県立劇場所在地に設置されていた。ここにも郷土史の先覚者として圭室諦成（たまむろたいじょう）と乙益重隆がいた。

圭室　諦成
熊本女子大学
『創立15周年記念誌』より

圭室は阿蘇草部の寺の出身で山鹿日輪寺の養子となり圭室氏を嗣いだ。東京に出て史料編纂所に入っていたが、戦時中は御多分に洩れず召集されて、対馬の防衛隊に在任した。終戦後熊本に帰ったが、疎開させた書籍が中々戻って来ず、やむなく手許にあった五万

分の一の地図を眺めて暮らすうちに地名の研究に没頭したことから郷土史の範疇に深入りし、大学に「郷土文化研究所」を設けて郷土史料の発掘と出版に傾注した。

このまとめられた史料集は荒木精之の日本談義社から続刊されて、多くの郷土史家達に史料として活用された。

圭室は昭和三四年に開始された『熊本県史』の編纂委員としてまた県史と同時期に開始された『熊本県議会史』の監修委員も勤めていたが、同三五年明治大学教授の職に招聘されて上京し、鵠沼（くげぬま）に居を構えていた。その後も熊本との繋がりは深く何かと言えば来熊していたが、昭和四一年小手術で入院して翌日退院という日に、薬害のため急逝した。惜しみても余りあることであった。

女子大のもう一人の学者は、考古学の乙益重隆である。球磨郡免田村（現あさぎり町）の出身で国学院大学国史学科を卒業して、昭和二四年から女子大に勤務していたが、同四五年に母校国学院大学教授として招聘され、その懇請に負けて東京に移った。

在熊中はほとんど毎月各地の発掘調査を要請されて席温まるに暇あらずという有様で、正に時代の寵児であった。熊本市関係だけでも国道五七号線拡張に伴う宇留毛の小磧横穴群・ＮＨＫ移転に伴う千葉城遺跡調査をはじめ、渡鹿遺跡・稲荷山古墳・富尾古墳等枚挙に暇がない程である。

乙益　重隆
『九州上代文化論集』より

女子大学生寮の舎監として寮生の指導に当っていた時も、学生の生活指導担当の時代も懇切な指導を続け、例の学生運動酣（たけなわ）な頃は過激な運動に参加しないよう説得に粉骨した。一方我々が質疑をもって訪問すると時間を忘れて応待してくれて、帰りの最終交通機関の時間が迫ると自転車で停留所まで送ってくれるという気のやさしい人であった。発掘のたびに報告文は出すし、国史学科の出であるからその方の論文も書くし、正に手八丁口八丁の学者であった。

国学院に出向された時は、もう熊本との御縁は切れたかと思ったが、国の文化財審議委員になるとまた直接の関係が生れ、七〇歳の停年慰労会では、今後は熊本を再々訪れたいと述べていたのに、一年足らずで卒然として逝った。熊本県の遺跡を網羅した著書の他、論文多数がある。

戦後は歴史のタブーがなくなり、文献史学も長足の進歩を遂げた。それには文献の読み直しと再確認が必要で、戦前地歴研究会が実施していたような古典の読書会が再開されねばならなかった。この古典読書会に先鞭をつけたのが徳永春夫・小松（後に志方）正和・野口三男を中心とする五高・東大出身の学徒で、いずれも五高で鈴木の薫陶を受けた者達である。

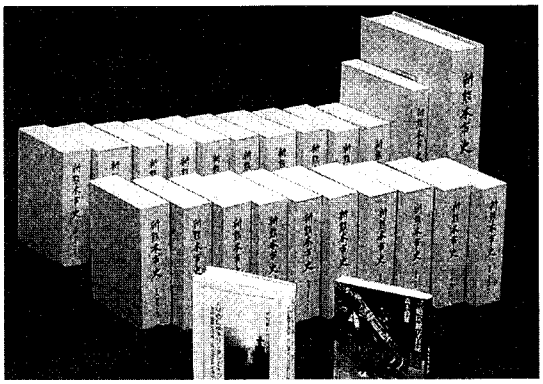
徳永　春夫
熊本西高等学校
『二十年史』より

徳永は東大の卒論に既に班田制に関する論文を発表しており、この読書会のリーダーであった。県史編纂の頃には古典の中央での解釈を次から次へと伝えて後進を被益した。風土記の甲類・乙類の区分等を人々は彼から聞き知ったのである。県教育庁・県立高校長・私立高校長を歴任して数年前に長逝した。

小松正和は後に志方家を継いで志方姓を名乗ったが、彼は『延喜式』の駅馬・伝馬の記載順から各官道の宿駅所在地に新説を出して世に公認され、また菊池氏の出自を平安時代の公家日記や公文書から解明して学界に認められた。志方はこの後も郷土史の解明に積極的な努力を続けたが、体調を崩して無念の死を遂げた。

野口は県史の軍事部門を担当し、陸海軍関係の史料がほとんど消滅または抹消された時期に、苦心惨澹してそれらの蒐集に当り、記述を全うした。県立高等学校に長く在職し、退職後も永く公民館等の講師を勤めたが数年前に永眠した。

なお文献史学では、森下功と花岡興輝の残した功績も挙げておきたい。



第25回熊日出版文化賞に決まった（手前左から）「天草の伝承キリシタンとオラショ」「地底の声」、奥2列は「新熊本市史」全21巻22冊

第25回熊日出版文化賞受賞

『新熊本市史』全21巻22冊

熊本日日新聞（平成16年2月7日）から

第二十五回熊日出版文化賞の選考会が六日、熊本市千葉城町のKKRホテル熊本であり、「地底（じぞこ）の声　三池炭鉱写真誌」（高木尚雄著、弦書房）、「新熊本市史」（新熊本市史編纂委員会編、熊本市）、「天草の伝承キリシタンとオラショ」（濱崎献作著、サンタマリア館）の三点が選ばれた。

新熊本市史

他を圧倒する内容・規模

同賞は熊本の出版文化を育てる目的で、県内在住者による優れた出版物を顕彰する。今回は昨年一年間に出版された約百二十点が対象。熊日の社内選考で十三点を候補に選び、同日、八人の委員で選考した。

選考は、投票と討議を繰り返しながら進められた。その結果、受賞作三点をはじめ、「お伽衆宮本武蔵」（井上智重・大倉隆二著、草思社）、「長崎原爆絵巻　崎陽のあらし」（深水経孝作・人吉高校英語研究会編、草の根出版会）、「鏡地方における干拓のあゆみ」（鏡町干拓史編纂委員会編、鏡町教委）が最終段階まで残った。

「地底の声」は、元炭鉱マンの著者が炭鉱内部やその周辺を撮影した写真集。「なくなってしまった炭鉱の様子を伝える貴重な資料」と、記録性の高さが評価された。

「新熊本市史」の編さん事業には約二百五十人が携わり、十五年かけて全二十一巻二十二冊を完結。「内容・規模ともに他の市町村史を圧倒している」とされた。

「天草の伝承キリシタンー」は、キリスト教徒の祈とうの言葉オラショの変容を著者自ら調査してまとめた。「九州一円を探索し、文献を渉猟した労作」と評された。

選考委員は次の通り（敬称略）。

川本雄三（県立劇場館長）鍬田吉豊（県立図書館奉仕課長）嵯峨一郎（熊本学園大商学部教授）嶋村清（九州東海大工学部教授）富田紘一（熊本市教委文化財課長）星子邦子（NPO法人ワークショップいふ代表）三浦洋一（県文化協会最高顧問）田川憲生（熊日編集局長）

編さんの方々に感謝

「新熊本市史」を刊行した　幸山政史熊本市長の話

全巻完結をうれしく思っていたところ、今回の受賞で、喜びが幾重にも重なった。編さんに携わられた方々に感謝し、喜びを分かち合いたい。刊行の背景には膨大な量の文書史料の集積がある。今後データベース化し、市民に利用してほしいと考えている。

第二十五回熊日出版文化賞

「新熊本市史」
熊本市様
新熊本市史編纂委員会様

あなたの著作活動は熊本県の文化振興特に出版文化の発展向上に大きく貢献されましたここに第二十五回熊日出版文化賞を贈りそのご努力とご功績をたたえます

平成十六年二月二十四日

熊本日日新聞社
社長　伊豆英

新熊本市史　全21巻22冊

■新　刊（第10回配本）

通　史　編	第4巻　近世Ⅱ	4,300円
	第7巻　近代Ⅲ	4,300円
別　　編	第3巻　年表・索引	4,300円

■既　刊

通　史　編	第1巻　自然・原始・古代	5,000円
	第2巻　中世	4,300円
	第3巻　近世Ⅰ	4,300円
	第5巻　近代Ⅰ	4,300円
	第6巻　近代Ⅱ	4,300円
	第8巻　現代Ⅰ	4,300円
	第9巻　現代Ⅱ	4,300円
史　料　編	第1巻　考古資料	5,700円
	第2巻　古代・中世	3,700円
	第3巻　近世Ⅰ	3,700円
	第4巻　近世Ⅱ	4,800円
	第5巻　近世Ⅲ	4,800円
	第6巻　近代Ⅰ	4,800円
	第7巻　近代Ⅱ	4,800円
	第8巻　現代	3,700円
	第9巻　新聞　上　近代	3,700円
	第9巻　新聞　下　現代	3,700円
別　　編	第1巻　絵図・地図	10,300円
	第2巻　民俗・文化財	5,300円

新刊本の紹介

通史編　第四巻　近世Ⅱ

■肥後藩の農政の展開を中心に、熊本市域の農村・港町の実態と人々の生活について、また教育・学問・文化についても幅広い分野にわたって記述

通史編　第七巻　近代Ⅲ

■第一次世界大戦、大正デモクラシー、世界恐慌を経て十五年戦争に突入していく時代背景の中にあって「大熊本市の成立」を目指す熊本市の姿を、社会運動などの視点も入れて記述

別編　第三巻　年表・索引

年表

■先史時代から平成11年までの熊本市域に関する主な出来事を、原始・古代・中世、近世、近代、現代の4区分で構成

■国内外の主な事件や熊本市に大きな影響を与えた出来事を、「国内・国外」欄に掲載

■特に話題性や特徴ある出来事には、簡単な解説を付記

索引

■通史編全9巻から、人名・地名・団体・事件・事物などの主要語句約15、200語（延べ26、000件）を抽出

■歴史用語、一般用語のほか、写真や図・表からも用語を抽出し参照項目表示も付記。巻末に通史編全巻の目次を再録

「市史編さんだより」は、新熊本市史編纂の経過を記録し、広く市民の皆様に事業の進行状況をお知らせすることを目的に、平成元年から発行してきました。

この度の『新熊本市史』全巻刊行により、この22号が最終号になりました。

皆様方には長い間の御愛読・御協力、大変ありがとうございました。

今後は、収集した文書史料をデータベース化することで誰もが利用できるようにするとともに、熊本市が保有する記録史料についても保存・整理していく事ができればと思っています。

（市史編纂室）

お買い求め

熊本市内の主要書店でお買い求め下さい。

お問い合わせ

熊本市　総務課　市史編纂室
〒860-8601　熊本市手取本町1番1号
TEL.096-328-2038